

# 教員長期社会体験研修報告【北海道コカ・コーラボトリング株式会社】

札幌市立東橋小学校 沢田 涼佑

## 1 研修の目的

大学を卒業し、教職について15年の歳月が経った。様々な地域でたくさん子どもたちと関わり、研鑽と経験を積むことで教師として成長できた15年ではあったが、最近は社会の急激な変化を実感することも多くなった。ここ数年のスマートフォンの普及やSNS、ストリーミングメディアの影響もあってか巷には情報があふれ、カテゴリによっては保護者や教師よりもはるかに豊富な知識をもった児童生徒がいても珍しくない時代となった。さらに学校へのニーズがどんどん多様化している実態から、ここ数年私は教師にも授業スキルなどと言った専門性の向上のみならず、社会人としての資質の向上が求められていると感じるようになっていた。そこで私は自分の視野をもっと広げたり、教職以外の経験を積んだりすることで自分の社会人としての資質をより向上したいと考え、今回の研修を申し込んだ。

研修先となった北海道コカ・コーラボトリング株式会社（以下、北海道コカ社）は、「北の大地とともに」をスローガンに掲げ、北海道を販売地域として清涼飲料の製造及び販売を行っているどさんこ企業である。私が所属した「広報・CSR推進部」は会社の広報業務と共にCSR<Corporate Social Responsibility（企業の社会的責任）>活動を担当し、「環境」「食の安全と健康」「地域社会」の領域に沿って北海道の持続可能な社会の実現を目指した活動を行う部署である。私は「地域社会」と「環境」の領域に関するCSR活動やその他の広報活動の業務を通して、昨今の教育現場でも求められている「環境教育」や「家庭や地域とともに進める学校づくり」へと繋がる経験を積むとともに、「SDGs」という考えについて学ぶことを今回の研修の目的とした。

## 2 主な研修内容 <配属部署>～広報・CSR推進部 広報・CSR推進課

広報の仕事は大きく「社内への広報活動」と「社外への広報活動」の2つに分けられる。北海道コカ社では、グループ会社を含めると全道で約1300人もの従業員が働いており、経営トップの思いや各社各部署の活動を従業員に周知するという点で、社内向けの広報活動は重要な役割を担っていると言える。社外向けの広報も新聞社やテレビ局と言った報道機関への広報活動や、生活者（一般の消費者）に対するPR、イベントなど、その業務は非常に広範囲にわたる。また「SDGs」を新たな指標ととらえることで、持続可能な社会の実現に向けた「環境保全」や「事業活動と連動した社会貢献」といったCSR活動にも取り組んでいる。

### 【社内向け広報】

社内向け広報のための代表的なツールとして、「社内報」と「社内ポータルサイト」がある。社内報は年に3回発刊され、1月号であればその年の全社方針、5月号であれば4月入社の新入社員紹介などの特集記事の他、新製品やキャンペーンの詳細などが掲載される。編集時期になると印刷会社や担当と何度もデータのやり取りを繰り返し、締め切りに追われる編集者の様な慌ただしい日々が続いたが、「難しい内容をわかりやすく伝える」ためには文章だけでなく、デザインやイラスト、レイアウトなどを工夫して表現することが大切と実感することができた。

一方で社内ポータルサイトでは情報共有の即時性が求められた。「早く、正確に」情報を発信・シェアすることが、営業現場へのサポートやリスク回避に繋がる。児童生徒の命を預かる学校現場と同様に、営利企業においても「リスクマネジメント」は職種を問わず最重要ファクターのひとつであるということを実感することができた。

### 【社外向け広報】

#### ■SNSアカウントの管理・投稿

北海道コカ社のSNSアカウントは広報が中心となって管理を行っており、1年を通して自分のルーティンワークとして毎月のスケジュールの管理や投稿を行った。投稿内容は製品訴求や

キャンペーンの告知、イベントの報告などがメインではあったが、日頃からリーチ（アクセス）数を伸ばすために、新聞やテレビだけでなく、ネットニュースなどにも投稿の材料になりそうな情報へのアンテナを張り巡らせるようになった。また「SNS映え」する写真となるよう試行錯誤するうちに、自ずと一眼レフカメラや画像編集のスキルが向上した。

## ■メディアリリース

新製品やキャンペーン、イベントなどを報道してもらうための案内となる「news release」を都度作成し、札幌商工会議所の北海道経済記者クラブにある各社のポストにリリースを投函したり、個別に取材を依頼したりすることもあった。過去のリリースをただ流用するのではなく、ブラッシュアップしたり実際に掲載された媒体がどれくらいあったかをチェックしたりして次のリリース作成に生かすなど、P D C Aサイクルの重要性を実感した。

## 【CSR活動】

### ■知床応援自動販売機寄付金贈呈式

初めて自分がメインとなって取り組んだ業務。斜里町・羅臼町内すべてのコカ・コーラ社の自動販売機の製品売上1本につき1円を世界自然遺産に登録された知床の環境保全のために両町に寄付する、事業活動を通じた北海道コカ社の代表的なCSR活動のひとつ。日程調整や現地販売課との打ち合わせ、寄付金の計上、リリース作成、資材の作成のほか、前日に斜里町に入り、当日の午前中に斜里、午後に羅臼で会場のセッティング、マスメディアへの対応、写真撮影などを行った。記者の寄付に対する質問に即座に答えることができずに資料を開いてしまう場面があり、事前準備の重要性を実感した。

### ■第28回YOSAKOIソーラン祭り

北海道コカ社は、YOSAKOIソーラン祭りのスポンサーとしての協賛や会場での製品・グッズ等の販売のほかにYOSAKOIチーム「コカ・コーラ札幌国際大学」を応援しており、広報は1年を通してこのチームのサポートやマネジメントを担当している。そのためYOSAKOIソーラン祭りの期間中は広報・CSR推進部のスタッフがほぼ総動員となった。私は社有車でチームの荷物の運搬やメンバーへの飲料提供を担当した。強豪ひしめく⑧審査ブロックの一位突破・ファイナル進出を控室で伝えられた時のメンバーの喜び方は、まさしく「青春」そのもの。踊り子さんたちの1年間の努力が報われた瞬間であり、そんな彼らから多くの刺激を受けることができた。

### ■キッズタウン

全道5つの市で実施される、職業体験を通じて仕事の楽しさや社会の仕組みを学び、まちの成り立ちを理解しながら地元への愛着を育んでもらうことを目的にした無料の親子イベント。子どもたちは職業体験をするだけでなく、体験の「給料」として受け取った仮想の通貨を使っ



ての買い物などを楽しむこともできる。開催に関する現地での事前打ち合わせや出展企業・団体への説明会、ヒアリングシートをまとめる作業や、会場のレイアウト、資材の作成や発送手配、リリース作成などを行い、実施後にはアンケート集計・分析や報告会の準備・実施など様々な業務に取り組んだ。参加者、関係者合せて千人規模のイベントを中心となって運営するという、学校では得難い経験を積むことができた。

### ■海辺の環境保全活動～浜益川下海岸ごみ拾い活動～

北海道コカ社は清涼飲料水を扱うどさんこ企業として、水資源保護活動推進のため道内各地で水を大切に様々な取組を行っており、その取組のひとつとして10月に石狩市浜益区浜益川下海岸のごみ拾い活動に参加した。特に多く見られたものはプラスチック製品で、PETボトルやビニル袋などの生活用品のほか、大陸由来と思われる漁具や容器なども見られ、「自然環境に国境はない。」ということが実感できた。この活動に参加して、環境保全には特定の人間だけが努力するのではなく、世界中のすべての人間が現状に危機感をもち、努力する必要があるということを痛感した。



## ■「廃棄物ゼロ社会」「容器の2030年ビジョン」に関する新事業の立ち上げ

アメリカ・アトランタにあるザ コカ・コーラ カンパニーは、グローバル目標として「World Without Waste(廃棄物ゼロ社会、以下WWW)」を掲げている。それを受けて日本コカ・コーラシステムは、使用済みの PET ボトルをもう一度 PET ボトルに生まれ変わらせる「ボトル to ボトル」を推進し、2030 年までにサステナブル素材(リサイクル PET 樹脂または植物由来 PET 樹脂)の PET ボトルの割合を 100%とすることで、新たな化石燃料を使用しない容器の完全導入等を目指す環境目標である『容器の 2030 年ビジョン』を設定した。

私はこの「WWW」と「容器の 2030 年ビジョン」の、北海道コカ社としての実現を目指した新事業の立ち上げに携わった。企画書や稟議の作成、関係者へのアポイントメントやプレゼンテーション、打ち合わせの調整や進行、議事録作成など、どれも不慣れではあったがひとつひとつこなしていくことで、様々な経験を積むことができた。学校の行事等は既存のものや過去の事例をベースに考えることが圧倒的に多かったため、ゼロベースで大きな事業を創り出す仕事の大変さと、やりがいを実感することができた。

### 3 研修の成果

北海道コカ社は、「SDGs(持続可能な開発目標)」を新たな指標ととらえたCSR活動に取り組んでいる。私は1年間の研修を通して、このSDGsについて考える機会がたくさんあった。そしてこの経験から、今回紹介した北海道コカ社が行っている「清掃活動」や「環境保全」、「PET ボトルのリサイクル」といった具体的な取組はもちろん大切だが、同時に私はSDGsを達成するためには「次世代の育成」が重要であると考えた。上述の「WWW」に関する新事業に関わって、「SDGs」を学校教育方針の柱の一つに設定している中学校を訪れる機会があり、私はその学校で板書にSDGsのアイコンを活用したり、全学級が文化祭でSDGsに関する掲示物を作成したりと、校内の至る所でSDGsに関連する取組を目にすることができた。

SDGsの17のゴールのひとつに「4. 質の高い教育をみんなに」という項目があるが、このゴールを達成するためには、我々教師の取組が不可欠であると言える。そのためにはまずは我々教師がこの『SDGs』についてしっかりと学び、正しい理解の上で子どもたちに関わっていく必要があると感じた。



もうひとつ、今回の研修で強く感じたことは「地域とのつながり」の重要性である。先述の通り、北海道コカ社は「北の大地とともに」をスローガンに掲げたどさんこ企業である。CSRという言葉が生まれる前から道内各地で様々な取組を行ってきた実績から、北海道におけるCSR活動のトップランナーと呼ばれ、地域からも厚い信頼が寄せられている。同時にこの信頼は北海道コカ社の事業活動にとっても、重要なファクターとなっていると言える。地域と協働することによって、北海道コカ社だけではできない事業に取り組むことができているのだ。言わずもがな、学校づくりは「学校・保護者・地域」によって成り立っているとされるほど、学校にとっても地域はまさに最重要ファクターであると言える。1年間の研修の間、北海道コカ社が積極的に地域へ働きかけることで、地域との「協働」の取組を生み出す場面を何度も目にした。学校もより積極的に地域への働きかけを行い、地域の信頼を得たり、協働で子どもに対して取り組んだりしていくことが、より良い学校づくりへと繋がっていくと考える。

また今回の研修の中で、自分の教師としての経験を北海道コカ社での業務に活かすことができたことも、大きな成果だと言える。特にキッズタウンの準備では運動会や学習発表会などの総務や会場係の経験が役に立った場面も多く、また打ち合わせなどでは参加者となる小学校3・4年生の実情、特に安全面を意識して考えたり、提案したりすることを心掛けた。イベント当日も特に安全面に留意しながら、積極的に参加児童やボランティアの学生と関わることができた。運営スタッフや出展企業・団体の皆さんの尽力のお陰もあり、どの会場も大きな事故やケガもなく参加者に楽しく参加していただき、イベントを無事成功させることができたことは今回の研修において大きな自信に繋がった。

## 4 研修から見えてきた学校現場における課題

今回の研修では「共有」という概念の重要性を実感した。北海道コカ社では社内ポータルサイトのカレンダー機能によって、全社員のスケジュールが共有されている。またメールの宛先のCCに課のメンバーを入れることによって、現在自分がどのような案件に取り組んでいるかを知らせ、受け取ることができた。情報共有が日常化・自動化されることによって、会議や打ち合わせも焦点化・短時間化されているのだ。さらに2019年4月1日の労働基準法の改正によって、時間外を含む労働時間の上限等の管理もより徹底されている。社員が働きやすい職場環境づくりのため、2020年1月からは勤務時間の「フレックスタイム制度」が導入されるなど「働き方改革」を進めると同時に、社員には「限られた時間」で成果を挙げるという責任を与えるということが、営利企業としての在り方だということを実感した。

一方、学校はどうだろうか。もちろん自分の学級や学年、校務のことは細部まで把握しているが、全スタッフが日常的・自動的に他学年や担当外の分掌に関するまで広く知ることができているだろうか。自分がミドルリーダーと呼ばれる年代となった最近、常にアンテナを張り巡らせたり、自分から管理職や担当に聞いて情報を収集したりすることで可能な限り校内の様々な情報・事情を把握するようにしていた。上司への「報連相」は社会人としてのいろはとして学校でもよく耳にすることではあるが、私はこの研修を通して「学校全体で子どもを育てる」ためには、より効率的な情報共有のシステムづくりと、全教職員が閉鎖的になることなくより高い「共有」の意識をもつことが大切だと考えるようになった。また営利企業と公教育との性質の違いはあるにせよ、「働き方改革」の進捗に関しては、学校現場が相当遅れを取っていることは否めない。北海道コカ社は「ワークとライフの充実」を目指しているが、これは営利事業ではない教師はもちろん、すべての労働者が目指すべき目標だと考えた。

## 5 研修の感想

この1年、北海道コカ社での研修を通して得ることができた一番の収穫は、「多くの人との出会い」だと言える。もちろんこれまでの教諭としての経験の中でも、たくさんの人のお世話になってきたことは間違いないが、広報・CSR推進課の業務では本当に様々な業界や職種の方と出会い、刺激を受けることができた。例えばキッズタウンのような社外イベントでは、自治体や出展企業・団体の方々との様々なコミュニケーションを通して多くのことを学ぶことができた。中には自分のようにいわゆる「出向」を経験したことのある方との出会いもあり、研修に臨む上での貴重なアドバイスを頂くこともあった。新しい環境で出会う人たちから受ける刺激は非常に新鮮で、教師になりたてだった頃を思い出す機会にもなり、自らの仕事に向かう姿勢を確かめることができた。この経験を、4月からの若手教員への関わり方の中で活かしていきたい。

また北海道コカ社内には様々な部署や地方の販売課、グループ会社があり、色々な事業やイベントを通してたくさんの社員の方と知り合い、一緒に仕事をすることができた。その中で感じたことは、「広い視野」をもつことの大切さだ。北海道コカ社には営業だけでも様々な部門があり、その他にもスタッフ職や技術職など、その部門は多岐にわたる。先に述べた「共有」の概念にも繋がることだが、広報の業務においても他部門についての知識や協力が必須だと感じた。そして私は学校においても、同様のことが言えると感じた。校内の他の学年や分掌の事情はもちろんだが、それ以外にも例えば異校種について広く理解することは、学校におけるステークホルダーである「児童・生徒」へのかかわりや指導にもより高い効果を生むはずである。研修の目的で述べた通り、昨今の教師の業務は非常に多様化してきている。私はこれからの教師には「スペシャリスト」よりも「ユーティリティプレイヤー」としての側面が強く求められるようになると思うので、今後も積極的に異校種連携などの機会や場を増やしていきたい。

北海道コカ社の経営指針の中には「生活者やパートナーとの共存共栄を図るとともに地域社会に貢献します。」という一文がある。ニーズが多様化していくこれからの教育において、私は北海道コカ社の様な「どさんこ企業」の協力を得ることが、これまででは難しかったことや新しいことに取り組んでいくためには有効だと考える。私は今回の研修で得た経験や繋がりを、「自立した札幌人」を目指す札幌の子どもたちの成長のために生かしていきたい。